

2018 年度 A セメスターキャンパスアジア交換留学プログラム (派遣先：ソウル大学校)

J1-170040 文科一類 1 年 高木亜月

1. はじめに

私は 2018 年度 A セメスター期間中、9 月から 2 月までソウル大学校自由専攻学部にて教養学部からの交換留学生として留学した。私は東京大学では前期教養学部にて所属しており、進学選択ではかねてより興味があった日本史を専攻する方向に進むことを予定していたが、それに先立ち、地理的・歴史的に深い関連のある韓国で学ぶことでより多角的な視野を得ることをこの留学の最大の目的とした。

以下、留学期間を通して得た経験、主観を含む考察をトピック毎に述べていく。

2. 衣食住ほか生活環境

i. ソウル大内学生寮

当キャンパスアジアプログラムでの派遣生は、ソウル大学校の広大な敷地内にある学生寮に入居することになる。寮は広大なキャンパスのやや辺縁部に位置するが、それでも徒歩またはバスを利用して、講義のある建物までは 5～20 分で向かうことができた。

室内設備については、1 つの部屋に 6 人が入居し、2 人部屋が 3 つに加え、風呂トイレ、洗面台、冷蔵庫とテーブルを備えたリビングルームが中央にあった。2 人部屋には大容量を誇る本棚、勉強机、ベッド、クローゼットがあったが、エアコンはリビングルームにしか無いため夏季は暑いのではないだろうかとも思われた。

また、韓国は冬の訪れが日本よりも早く、また気温も東京と比べると大きく下がり、12 月頃には最低気温がマイナス 10 度を割り込むこともしばしばだった。しかし、部屋に韓国の伝統的暖房設備であるオンドルが完備されていたため、室内の気温は常に 28 度以上に保たれており、毎日半袖で過ごすことが可能な程温暖で快適であった。

部屋について唯一苦勞したことを挙げるとすれば、部屋の網戸に不

備があったのか、冬の訪れが早いにもかかわらず 12 月頃まで出沒する、韓国の巨大でしぶとい蚊に悩まされたことだろうか。近くに樹木が植えられていたこともあってか、多い時には 1 日に 10 匹近くの蚊と格闘することになった。(写真割愛)

919 棟内の設備については、1 階に TA 室、ウォーターサーバーがあり、地下一階に朝昼夜は食堂として、夜間は自習部屋として開放されている大きな広間、雑貨や食料、豊富なスナック類を取り扱う売店、さらに共用キッチンスペースや無料で使用できる洗濯機・乾燥機、ジムがあった。私はいくらか共用キッチンスペースを利用して自炊もしたが、食堂も多数利用した他スナック類も夜 1 時まで売店で入手でき、食には困ることなく生活していた。

そして寮棟の外については、多数の寮棟が密集して建つエリアの中心部にいくつかの食堂、個別の飲食店、雑貨店、他 ATM やカラオケ等を含む様々な施設、そしてコンビニエンスストアがあった。私の 919 棟はこれらに近いところに立地していたため、非常に頻繁に利用し助けられた。

私は留学をする前は家族と共に生活していたため、一人で生活する経験自体が初めてであったが、総観として、約半年間の間特に大きな不自由をすることなく過ごすことができたように思う。

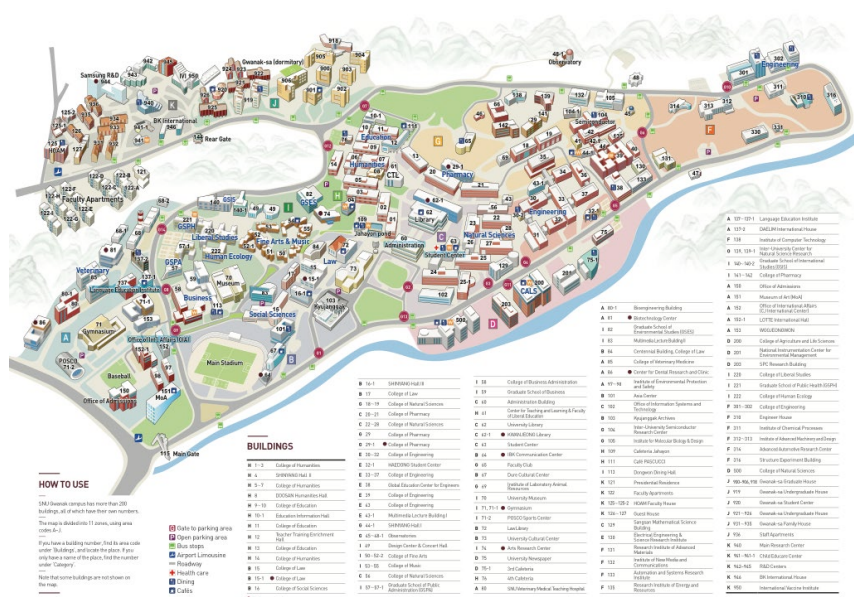


Figure1. ソウル大の構内図(ソウル大ガイダンス冊子: *Seoul Survivor* より)

人的交流面に移ると、私の入居した 919 棟は留学生を対象とした棟ではなく、入居者の多くは韓国内出身の学生が占める。しかし偶々私の部屋は、一部屋に 6 人が生活するうち私を含む 4 人が韓国外からの留学生という、TA 曰く「棟内で最も国際的な」空間であった。日本人が私 1 人、中国語を母語とする学生が 2 人、ヨーロッパからの学生が 1 人、そして韓国人の学生が 2 人の内訳で、部屋全体での必要なやりとりは滞在を通して英語であった。加えて、6 人が生活するとはいえ所属も履修する講義もそれぞれが異なるため平日は早朝或いは夜を除けば他のルームメイトと顔を合わせる機会はあまり多くなく、休日にも多くの寮生は友人などと一日中外出することがほとんどであった。結果として私が部屋の中で最も割合として多く耳にすることになったのは、ルームメイトの中で平日休日、昼夜を問わずリビングルームのテーブルにて談笑していた留学生二人の中国語という、不可思議な経験となった。

ii. ソウル市内

普段の必要最低限の生活はキャンパス内、寮近くの設備で十分に事足りるが、食料品の買い物、あるいは観光、外食などでソウル市内に出る機会も頻繁にあった。寮から市街までは歩くと 20 分ほどであるが、通学する学生用の無料シャトルバスが朝から夜まで運行する他、寮の目の前からも最寄り駅発着の民間バスがあり、最寄り駅まで行けば、飲食店、日用雑貨店、スーパー等一通りの店舗に行くことができた。またそこから電車を利用すれば各地の繁華街、有名観光地に行くことも可能であり、休日にはよく外出をしてソウルの町並みを楽しんだ。特に大学内では学生の英語力も高いため、ほとんどの場で英語が通じたり韓国語を介さない者へのサポートが充実していたりしたのであるが、大学外では日本と同じように英語が通じない機会も多く、韓国語の上達のためにもあえて意識的に街へ出ることを意識していた。



Figure3. 秋夕にルームメイトと訪れた景福宮

3. 大学での学習

i. 受講した講義

ソウル大では、東京大学内と同様に、リベラルアーツ学部である自由専攻学部に所属した。ソウル大は東大の制度とは異なり、入学当初はリベラルアーツを実施した後各自が専攻分野を決める自由専攻学部の学生がいる一方で、入学時から専攻分野を決めており一貫して自らの所属する学部にて開講される講義のみを受講する、日本での他大学と同様な制度に学ぶ学生とが併存している。その結果自由専攻学部の学生は、自らの学部で開講される幾つかの講義の他は、他学部の講義を他学部の学生に交わりながら受講していくことになる。この仕組みの下では、リベラルアーツ制の高い自由度の下、高い専門性を有する他学部の講義を受講できるため、非常にメリットが大きいと感じた。

また制度面では、東大との共通点も見出せる。その一つとして、東

大において俗称される「優三割規定」と非常に近い制度がソウル大にも存在し、ソウル大では A 評定が与えられるのは全体の三割、そして東大の良にあたる B 評定は全体の四割までと定められている。それに従って、学生の姿勢も東大と非常に近いものを感じた。

一方で、学生の学期中の生活は東大との大きな相違点もあるように感じた。在籍する大半の学生が受講する韓国語の講義を受講していないため、一概に当てはまるかは不明だが、私の受講した講義と知人から聞いた話により考えると、ソウル大の授業は東大に比べ非常にウエイトが大きく、ほぼ全ての授業において期末試験に加え、全ての授業での毎回の出欠確認、少なくとも一度のレポート提出と全体発表、学生討論が課された。

そうした講義の性質の違いもあり、大学生の学期中の過ごし方は日本の場合とは大きく異なっていた。私のとった授業では各授業で関連論文が週に数個提示されたこともあり、学期中は基本的に毎日課題や発表準備、関連する学習に昼夜を費やし、自分の好きな勉強をする時間や本を読む時間が確保できないことにストレスを感じる時期もあった。駒場の教養学部課程に在籍していると数々の不満、疑念の声を聞くこともあるが、その制度にもメリットもあるのだと、駒場を離れて初めて実感した。

なお、私は韓国語学習経験のほぼ全く無い状態で学期を始めたため、全て英語で開講される講義を受講した。韓国語の学習については、私はソウル大及び語学堂の外国語としての韓国語の授業は受講しなかった。韓国語学習については ii. にて後述する。

以下に、私の履修した講義の一覧、並びに各講義の大まかな内容を【科目名／曜限／人数規模】の順で述べる。

- Selected Topics Seminar: Rethinking Korea／月水 15:30-16:45／30 人程度

韓国、朝鮮半島に関わる古代からの歴史や文化、などについて毎週トピックを変えながら、毎週 2 回の授業のうち片方では関連論文を読むなどし、もう 1 日では担当学生がプレゼンテーションをした。自由専攻学部の授業であることから、受講者はほとんどが韓国人学生であ

り、特にプレゼンテーションなどでは韓国語が登場することも多く、苦勞する場面もあった。

- Independent Research／木 17:00-20:50／30 人程度

自由専攻学部で開講された、駒場でいうまさに ALESA/ALESS に相当する授業で、履修する学生がそれぞれ 2～5 人程度で班を組み、学期を通して 1 つの論文を書き上げる。ただし、授業時間内で指導を受けることよりも、論文を書き上げることに主眼が置かれていた。私はキャンパスアジアプログラムに同じく参加予定の学生と 2 人で班を組み、”Comparative study Between Seoul and Tokyo -Focusing on urbanization problems and policies-“ という題で論文をなんとか完成させた。本来は論文提出に加え、最終週に内容に関する全体発表を行うものだったのだが、留学生とのことで私の班は全体発表を免除していただき、大変ありがたかった。

- East Asian Buddhist Culture／火木 15:30-16:45／20 人程度

イギリス出身の教授にアジアの仏教について教わるという、アジア地域に住む私からすると少し不思議な位置付けとなった授業。他の受講生は、ベトナム、中国、香港、韓国等アジア圏の学生もいた一方で、全体としては欧米圏の学生が多かった。

自分たちの文化圏について他文化圏の人と話し合うと、価値観として違う世界に生きる人たちからすればこそその感想、視点があることを知らしめられ、すごく新鮮で貴重な経験になったように思う。特に一度授業中に『ラストサムライ』のワンシーンを鑑賞した回では、日本人から見ると可笑しくてたまらないが中々気づかないような点もあり、また反対に、欧米の人から見てもおかしい部分があることに気づくような点もあることなどが垣間見られ、非常に興味深かった。

- Two Koreas／水金 14:00-15:15／30 人程度

朝鮮王朝の終焉から 21 世紀に至るまでの南北朝鮮の近代史、他国や相互の交流・交渉史の授業。担当は大学院国際関係学に所属する、韓国人の教授だった。隣国の歴史である韓国朝鮮史について我々は、高

校までの教科書等でも多少は体系的に知識を持っているように思いがちかもしれないが、学期を通して知らないこと、初めて知ることが本当にたくさんあり、終始「知っている」ことの多さよりも「知らなかったこと」の多さを痛感することとなった。

受講者は欧米からの留学生が圧倒的に多く、特に国際関係論系を専攻する熱意ある学生が非常に多かった。週2回の授業のうち1日は毎回学生によるプレゼンテーションとディスカッションがあり、長き、広きにわたって熱い議論が交わされることがしばしばであった。英語力の問題から理解、意思表示に苦労することもあったが、各国の学生の勉強の仕方なども学べる貴重な場だった。また、歴史を辿る過程で必然的に少なからず日本との関係にも言及がなされるため、日本人受講者として意見を求められることもあり、毎回の授業に重みを感じる授業だった。

特に韓国朝鮮やその歴史に対する欧米人の認識、立場は、日本人である私からすると時としてかなりの乖離や温度差という言葉で表すべきような差異があることも多々あり、それは各学生の知識の貧富や学力が原因というよりは、各国各地で教育の中で教えられる事実の選択や、それぞれの暮らす国や文化圏との関係性などの違いによってもたらされているのではないかと感じられ、授業期間中に限られず自分の中に大きな学びと問いを残してくれた。

- Principles of Accounting／木 9:00-11:50／7人

経済学部で1年生が必修として学ぶ内容を英語で学べる授業で、定員は100名で広大な教室が割り当てられていたのだが履修者は10名に満たず、教授との距離感が近く非常に濃厚な時間だった。教授はタイ出身の講師ではじめの数週は独特のイントネーション等英語に慣れるのにも労力を費やしたが、講義はとても分かりやすく、毎週教科書のかなりのページを進め定期的に課題も出されたが、内容をよく吸収できたように感じる。

一方で授業の進み方には積極的発言やグループワークを重視する特徴があり、今まで私の受けてきたどの教育ともかなり雰囲気が異なっていたため、大きく戸惑った面もある。特に駒場での授業では、「教授

の問いかけにいち早く回答すると行為に対して加点がなされる」というような形式に今まで出会ったことがなく、複雑な感想を抱くこともあるとともに、再び東京大学の講義を客観的に見つめ直す機会ともなった。

ii. 韓国語学習について

先述の通り、派遣前の検討の結果私は、希望者が追加受講できるソウル大の韓国語学習プログラムは受講しない選択をした。大きな理由としては、教科書などをキャンパス内で見たときに、解説が英語でされている教科書が多く、私は英語を経由するのではなく、日本語から直接韓国語を比較・学習する方法で勉強がしたいと思ったことがある。実際の授業では英語は用いられず全て韓国語で進行するのかもしれないが、当時は全く韓国語学習において初学者であったため、自分のペースで学習を進める道を選択したいと判断し、日本の書店で購入した教科書類を用いて、留学期間中独習をある程度進めることとなった。

はじめはキャンパス内や街中等の標識、看板を読むのにも苦労を重ねたが、日常生活の中で大量の情報に触れ、実践の機会に晒され続けた結果、徐々に文字を読み理解する経験、自然なコミュニケーションを模索する経験を重ね、渡航後3ヶ月が経ったあたりから、就寝中の夢の言語が英語、韓国語に切り替わり始めた。しかし一方で同時期から、物事を思考したり伝えたりしようとした時に、それまですぐに思い浮かんでいた英語がとっさに出なくなる代わりに韓国語が思い浮かぶ、日本語が出づらくなり韓国語が先に思い当たる、など頭の中で複数言語の混乱が起きるようになった。これは、ひょっとしたら言語学習ではよくあることなのかもしれないが、加えて私自身の場合、それ以前に英語圏にも居住経験がなく、英語で全ての授業を受けるような体験も今回の留学が初めてだったので、同時に二つの外国語環境下に置かれ、言語習得を並行して行っている状況だったため、得るものも大きい代わり恒常的に今までに無いような負荷がかかっていたように思う。

iii. 大学の学習環境全般

ソウル大学キャンパスの環境面は、東京大学の駒場キャンパス、駒場キャンパスと比較すると、まず設備が新しいことが特徴に挙げられる。私の通っていた冠岳キャンパスは、1970年代以降に建設されたキャンパスであるため、私の今まで東大で利用したことのある建物の多くよりも新しい。最も端的にそれを感じた例として、学期が始まって暫くの間、確認した限り全ての建物にエレベータが備えられていることが、私に素朴ながら大きな感動を与えた。

またキャンパス自体も先に地図を紹介したように(*Figure1*)大変広大である。寮の2人部屋で相部屋だった4年生の学生によると、彼女は入学してから大学の建物の位置をおよそ覚えるのに1学期丸々を費やしたという。実際に、冠岳キャンパスは冠岳という山1つを使用しているため高低差もかなり激しく、講義によっては、移動にはキャンパス内を走るバスを利用せざるを得ず、また大学内ではセグウェイ等の二輪車で移動する学生がかなりの数見られた。

そして学生らが日々利用する上で、並んで強い印象を与えたのが、図書館の設備であった。中央図書館は、本館は1970年代の完成なのだが、本館と連結する新館は完成されてから未だ5年程度しか経っておらず、内装外観の清潔さだけでなく、自習専用の広大なフロアが数階にわたりいくつもあったり、グループで利用できる個室自習室がいくつもあったりし、また自習専用フロアに隣接するホールに気分転換・血行促進用と思われるフィットネスバイクが置かれていたのには驚いた。

そしてとりわけ、私自身が日々利用する中で最も良いと感じたのは、東大の図書館よりも長い開館時間である。建物やフロアにより異なるものの、夜は遅いところで23時まで利用できる自習フロアが多数あるのに加え、一部フロアは24時間開館していた。これは休祝日や年末年始などの授業日以外にも同様であることが多く、特に学期終了後、長期休暇中のかなりの日数を私は自習フロアで過ごした。

4. 留学中の体験・経験

ソウル大学校のサークル他各種団体の多くは、或る時期、多くは学

期の始めに入会募集を行うことを除いては入会志望者を受け付けていないようであり、興味に合致する団体があまり無かったことも相まって、私は大学においては特に何か課外活動をする事無く過ごした。しかしその代わり、学期期間中・長期休暇中を問わず、学外において自ら意識的に色々な場所へ行くなど多様な体験を積むようにしていた。その中でも最も大きな印象とともに残っているのは、1月下旬に参加した、日本ツアー会社主催の南北境界線(DMZ)ツアーなどである。

近年日本と韓国の間では頻繁にニュースに上がるような出来事が起きており、また韓国・北朝鮮と世界各国の関係においてもしばしば世界的に注目を集めるような出来事が起きているように思われるが、私の留学していた半年間にも様々な変化や出来事があった。このDMZツアーに私が参加したのは、帰国の直前であったが、私の参加した時点では、かつてはツアー客が入ることのできた板門店等いくつかの建物やエリアにはその時点で入ることができなくなっており、更にその後現在に至るまでに韓国と北朝鮮の関係は再び変化を続けている。私が半年間に経験したソウルの雰囲気は、数ヶ月後、或いは数年後経った時には、全く異なるものになっているのかもしれない。

5. 留学後についての簡単な補足

私の留学期間は一学期、月数にして5ヶ月強と、例えば他国の大学や大学院に進学するような場合と比較すれば短い期間であり、留学中としても、カレンダーを追ってみれば長いようでありながら帰国直前の体感としてはあっという間に過ぎ去って行った一学期であった。しかし帰国をした後になると、自分がある程度の期間において日本という文化圏から離れていたことを幾つかの点で感じる事となった。

第一には、言語の点においてである。派遣前に韓国語の学習経験が全く無い状態で渡航したこともあり、半年間を経ても自分の韓国語能力はまだまだ初学者の域を出ず、日本語単一語話者のままだろうと思いきや帰国したのだが、しかし家族や友人と、また外出先などの日常生活に戻ってみると、日本語が咄嗟に出てこなかったり、頭で吃りが生じ

るようになったり、と数々の障害が起きた。結果的にこれらは1～2ヶ月人と会話をして暮らすうちになくなったのだが、他の言語の習得の如何に関わらず、それまで使用していた言語を長く使わずにいと(私の体感としては3ヶ月程度ではなかろうかと思われる)何らかの不具合が起きるのだと身を以って知ることとなった。

そしてもう一つ、第二の点として挙げたいのが文化面の慣習である。これは例を挙げれば、エスカレータでの立つ位置、道路で車の走行する位置、電車でのマナーや道ゆく人々の振る舞いなどきりが無いのであるが、現在でも最も思い出すことが多いのが食事に際する文化であり、食事マナーについては殆ど日本文化への「矯正」に近い程にその差異を意識することが必要となった。この現在に至る体験は、日本と韓国という二国、二文化圏を考えるとときに、地理的な近さがあるとはいえ両者の間には数、質を問わず実に様々に相違する点が存在するということを認識させてくれる。なお、例えば韓国では酒・たばこ類が満19歳からと定められているなど、こうした差異のいくつかは法・制度面からも窺い知ることができる。

6. おわりに

留学前、そして留学中には私は進学選択先として日本史、或いは歴史学を専攻することは、自らの中での最大の選択肢でありこそすれ、絶対的に決断していたわけでは実はなかったのであるが、この韓国ソウル大での一学期を経た上で、幾分逆説的にも思われることだが、私は進学志望先を従来通りとすることを最終的に決意するに至った。それは何より、学期中に受講した幾つかの講義と自分で選択した幾らかの読書から得た知見とその分野の広がりによるところが大きいのは事実であるが、しかし他方で、自分で据えた目的に沿う形で集中的に修養を積む、または修養を積もうと様々な労力を投ずるこうした期間を経験することなくしては、現在の結論にも到達できなかったはずなのである。現在文学部にて開講されている様々な講義を拝聴しても、日本やアジアに関する研究をなさっている上で、韓国やその文化等に知識、造詣を持たれる教授が大変多いように感じられる。今後自分が専攻に進み学問を深めていく上でも、今回得た知識、視野、可能性が役

に立つことがきっとあるように思われるし、また積極的に役に立てる機会を活用していきたい。